

ふくしまからのアピール
—有機農業の価値と持続可能な社会へ希望の光り—

2014・IFOAM世界大会

NPO法人福島県有機農業ネットワーク理事長 菅野正寿

<原発と人間は共存できない>

私はふくしまの有機農家です。

私は皆さんに、そして農民に、「原発と人間、原発と農業は共存できない」ことを強く訴えます。

そして原発のない新しい時代のためにふくしまから希望の光りをよびかけます。2011・3・11の大地震・大津波・そして原発事故から3年7か月が過ぎました。原発事故は膨大な放射性物質の放出により、ふくしまをはじめ東日本の山林・農地・海洋を次々と汚染して、私たちのくらしと環境が著しく脅かされました。とりわけ自然の生態系を守り、健康な作物、健康な家畜を営んできた有機農業への打撃は深刻です。

津波で家も農地も流された苦しみ、未だに13万人が避難している苦渋、放射能の不安にいる子供たち、そして自ら命を絶った農民。

私たちはこの苦しみと向き合い、土を耕し、希望の種をまいてきました。

<農家と大学研究者との共同による放射能汚染の実態調査>

汚染された土壌の測定、水の測定、農産物の測定、そして私たちの身体の測定(ホールボディカウンター)を続けてきました。

色も匂いもない、見えない放射能の見える化のために、福島大学をはじめ大学研究者と有機農家による共同の実態調査に取り組んできたのです。

残念ながら国土の70%を占める山林の汚染は深刻です。ふくしまの野生のきのこ、山菜は出荷できません。山林の落ち葉が放射性セシウムを吸収し、樹木に移行するという自然循環にあるからです。この山林の除染が大きな課題です。

しかし、皆さん、原発事故から2年目にして耕して栽培した米や野菜から放射能はほとんど検出されなくなったのです。茨城大学名誉教授の中島紀一先生はこれを「ふくしまの奇跡」と呼びました。

土を耕すことにより、放射性セシウムが土中に強く吸着・固定化されて農産物には移行しないのです。新潟大学の土壌学、野中昌法教授との共同の調査で明らかになりました。しかも多様な微生物の腐食の多い肥沃な土壌、つまり有機的な土壌ほど固定化されることが科学的に証明されてきたのです。この土の力に感動しました。皆さん、有機農業が農地再生の光りです。

<有機農業の価値と農山村の豊かさ>

温帯モンスーンの日本は米づくりが 3500 年続いてきました。

その土地に土着して堆肥を入れ、土を肥沃にしてきたのです。

放射能汚染により耕すことのできない、避難区域の荒廃した農地を見ると心が痛みます。私たちの友人の有機農家は福島第一原発から 16 ㎞の避難区域で有機米の試験田を栽培してきました。周辺が雑草だらけのなか、その有機の試験田にだけトンボが飛んだのです。私は感動しました。

私たち有機農家は米や野菜だけをつくっているのではない。豊かな生き物や美しい田園風景の環境をつくってきたことを訴えます。

そして子どもからお年寄りまで共に働き、食料とエネルギーを自給する地域コミュニティを育ててきたことを。

今、ふくしまでは太陽光発電、水力発電、バイオ燃料、菜種や大豆の食物油など再生可能エネルギーへの挑戦がはじまっています。私のトラクターもベジタブルオイルに変えました。

日本は世界有数の長寿国です。それは米と野菜、小魚、そして大豆や小麦など春、夏、秋、冬の多様な旬の食生活を育ててきたからです。日本の「和食」がユネスコから無形文化遺産に登録されました。まさに島国の豊かな土壌を家族農業で営んできた農民こそが無形文化遺産なのです。

<物質文明から生命文明へ都市と農山村の新しい関係づくり>

原発事故後に多くの市民団体やNPO、NGOそして企業の皆さんにご支援をいただきました。今ふくしまではこの都市と農山村の新しい関係づくりがはじまっています。

大学生や市民の方や企業の方が福島で米づくりや野菜づくりに汗を流しているのです。有機農業を志す若者もふくしまにやってきます。企業の持っている資金と技術を再生可能エネルギーと地場産業を生み出す地域雇用にいかしてほしいのです。

大量生産大量消費、大量廃棄の都市のくらし、経済成長の物質文明を転換していきましょう。農山村で土を耕し種を蒔き、作物を育てることが、地域を育てます。命を大事にする生命文明の人間復興の経済を共にすすめましょう。

皆さん、ふくしまには夢があります。

子どもたちが野良をかけまわり、学生も都市の市民もお年寄りも障がい者もトンボもカエルも共生する、持続可能な社会です。地域が輝く、原発のない社会を共に作りましょう